会報
札響くらぶ
2018年4月 第82号
編集・発行／札響くらぶ　〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1-15 札響事務局気付
ホームページ http://sakkyoclub.net/sakkyoclub/

第20回札響くらぶサロン（2018年1月21日　豊平館）
ブラームスに酔わされて

ヴァイオリンによる五度、六度の和音が、19世紀の雰囲気をとどめる会場の空気を心地よく震わせる。歌謡性に満ちたブラームスの抒情がしっかりとした造形の上に浮かび上がる。第20回目の札響くらぶサロンは室内楽の醍醐味をたっぷりと届けてくれただけではなく、僕自身に一人の作曲家への淡い憧憬と最も多感な時期の感動をよみがえらせてくれた。

コンサート・マスター、協奏曲のソロ奏者としての田島高宏氏の音楽性に限りない親近感を覚えてからかなりの時間が経過した。特にシューマンの第4交響曲、ブラームスの第1交響曲、R・コルサコフの交響組曲「シェエラザード」、モーツアルトの第4番と第5番の協奏曲の繊細なソロに魅せられ、いつか彼の室内楽を聴いてみたいという願望を持ち続けてきた。それがやっと実現することになったのである。それも僕の大好きなブラームスの第1番のソナタ(ト長調)によって。

田島さんご夫妻のデュオ

ブラームスの3曲のヴァイオリン・ソナタにはどれだけ心を慰められたことだろう。集めたCDも優に50組を超えた。

「ヴァイオリンという楽器にとって究極の作曲家は誰か」という問いには、ヴァイオリニストは時にはバッハ、またある時にはイザイの名をあげる(パガニーニと答える人はまずいない)。しかし、ひたすら音楽を聴くことしか能のない、ミーハー族の僕にとっては断然ブラームスなのである。書斎の椅子に身を沈めながら瞑想にふけるひとき、彼のヴァイオリン・ソナタの旋律が僕の傍らを通り過ぎれば、そこは極上の空間となり、贅沢な時間が約束されるのだ。

ライブラリアン中村さん

そして、すぐれた演奏はそれに耳を傾ける者の記憶を呼び覚ます。

田島氏の繊細なサウンドが一杯のワインで敏感になった僕の鼓膜をくすぐった時、ほぼ50年前の初冬の光景がよみがえった。まだ学生だった僕は、今はもう存在しない札幌市民会館でD・オイストラッフの奏でるブラームスの第1番のソナタに酔いしれた。第2楽章アダージョ、振幅の大きい深々とした和音の響きが暖炉からのぬくもりのようにフトコロの奥までしのび込み、凍える心を癒した。僕の演奏会詣で歴で10指に数えられる瞬間であった。

田島氏の音造りは恰幅の良さを強調するものではないのだろう。どちらかというと、楷書風の様式感と透明で清楚な音色にその美質が秘められているものと思われる。聴きどころはやはり第2楽章であろうか。五度、六度の和音の裏側にしのびよる内省的美しさが絶品であった。息の合ったピアノ伴奏がそれに花を添えていた。適度な規模の空間でということもあり、ブラームスの室内楽の醍醐味を満喫できた。

加えて、演奏者自身による、ブラームス詣でのトークも会場の雰囲気を盛り上げるのに一役買った。ブラームスという作曲家には、個々人の熱い思い入れがあるのだ。

田島氏の演奏に先立つひとき、札幌交響楽団ライブラリアンの中村大志氏が行った講演内容も奥が深い。

僕がクラシック音楽を聴き始めた中学生の頃、B・ワルターが指揮する「英雄」交響曲に驚いたものだった。第1楽章大詰めの部分、スコアに記されていない旋律をトランペットが吹いているではないか。さらに全曲盤と銘打たれているのに、大幅なカットが施されているオペラレコード、あるいはテノール歌手のスタンド・プレイなどなど、作曲家が精魂傾けて書き記した楽譜の権威はどのように保たれているのか、僕の思考はそこでほぼ停止したままだった。

それからかなりの時間が経過した今回、楽譜の管理を通して得られた様々な背景、演奏の実態等々を披露してくれた中村氏の講演は、僕の思考回路に再び流れを呼び戻してくれた。新たな角度からもう一度音楽を見つめ直してみようと。

ポンマーさんの飛入り演奏

20回目のサロンを飾るのにふさわしい、内容の濃い企画であった。急遽かけつけた、札響首席指揮者M・ポンマー氏も同じ思いであっただろう。担当の上野文博氏の尽力に敬意を表したい。

会員／村岡範男

5月~7月定期演奏会　名曲シリーズ

演奏会を楽しく聴くために

八木幸三（札響くらぶ顧問）

第609回定期演奏会
5月18日（金）19：00
5月19日（土）14：00
指揮　高関　健
ピアノ　シャルル・リシャール＝アムラン

■ショパン　ピアノ協奏曲第1番

二十歳前後の青年が、恋いこがれる女性を思いながら素敵な協奏曲を作曲する。そんなロマンチックな背景で書かれたのがこのピアノ協奏曲だ。ショパンは、ソプラノ歌手のコンスタンティア・グラドコフスカに恋心を抱いていた。1830年10月にワルシャワでおこなわれた彼の送別演奏会でこの曲は初演されたが、この時彼女も出演している。この第1番のホ短調作品の前に第2番ヘ短調作品がつくられているのだが、ヘ短調作品のオーケストラ譜を出版社に送るのが遅れたため、ホ短調作品が第1番となった。彼女への思いは、すでにヘ短調作品の緩徐楽章にも内包されているが、ホ短調作品のアダージョ楽章にも思いが委ねられていることは明らかだろう。しかし、ショパンの彼女への言葉による告白は最後までなかった。

高関　健
ⓒ佐藤雅英

シャルル・リシャール＝アムラン
ⓒElizabeth Delage

■ブルックナー　交響曲第3番「ワーグナー」（1877年第2稿）

ブルックナーの音楽は、ベートーヴェンやシューベルトの作品から大きな影響を受けているが、交響曲第3番以降からワーグナーの影響が、和声や管弦楽法からも色濃くなっている。1873年9月にブルックナーは、交響曲第2番と終楽章がまだスケッチ状態にあった第3番を持参しワーグナーを訪ねた。そして、第3番をワーグナーに献呈している。この曲は、作曲者自身が「ワーグナー交響曲」と称したように第1稿においては、「トリスタン」「ワルキューレ」さらに「タンホイザー」などワーグナー作品が多数引用されていた。しかし、改訂が進むにつれ、そうした部分は大幅に削除されている。ちなみに1873年に完成された第1稿と比べ、現在多く演奏される第3稿は全楽章の小節数が412小節も少ないのだ。

今回演奏される第2稿は、1877年、当初指揮を予定していたヘルベックの突然の死去によりブルックナー自身の指揮で初演される。しかし、その初演は大失敗に終わった。オーケストラが、彼を十分に受け入れていなかったことが理由にあげられている。ハンスリックは、「批評するよりは、むしろ謙虚な気持ちで彼の巨大な交響曲を理解できなかった」と述べている。しかし、この改訂稿は、第3稿に比べてブルックナーらしい濃厚な粘着性を第1稿同様感じさせる魅力がある。

飯守　泰次郎
ⓒ武藤章

第610回定期演奏会
6月22日（金）19：00
6月23日（土）14：00
指揮　飯守　泰次郎
チェロ　石坂　団十郎

■ドヴォルジャーク　チェロ協奏曲

ドヴォルジャークは、50歳代になり国民音楽院の院長としてアメリカに招かれ、そこで交響曲第9番「新世界より」や弦楽四重奏曲「アメリカ」などの傑作を生んだ。この時期の最後に書かれたチェロ協奏曲は、黒人霊歌やアメリカ・インディアンの民謡を思わせるが、「新世界より」と同様、それらの音楽に刺激を受けながらボヘミア音楽を基底として哀愁をおびた叙情的な旋律で描かれている。ブラームスはこの曲を聴き「こんなチェロ協奏曲が人間の手で書けることをもっと早く気付いていれば、私がとっくに書いていただろうに！」と嘆息したと言う。

第1楽章から自由で伸び伸びとした楽想が弾き出され、第2楽章のひときわノスタルジックな旋律が、作曲者の情感を鮮やかに浮かび上がらせている。チェロの超絶技巧が生かされた第3楽章は、郷愁の念が最後に大きな開放感をもたらせているかのようだ。

石坂　団十郎
ⓒMarco Borggreve

■チャイコフスキー
交響曲第６番「悲愴」

チャイコフスキーは、「私は自分の創作の最後を飾るような雄大な交響曲を作りたい欲望に駆られている」と第６番を書き始め、完成したときに「私の一生で一番良い作だ」と言い残した。確かに作曲者の最高傑作のひとつなのだが、終楽章はアダージョ・ラメントーソで悲しみを秘めながら曲は閉じられ「その標題は主観的なもので、私はこの曲を頭の中で作曲しながら、しばしば涙を流した。」という謎めいたことを言っている。１９７８年、旧ソ連の音楽学者オルロヴァ女史の論文でチャイコフスキーがホモセクシャルで、ある侯爵の甥と特別な関係にあったことが知れ、同性愛者を忌むべき犯罪とした帝政ロシアが秘密法廷による弾劾裁判で彼に死を求め、自殺を強要したと言うのだ。これが真実だとしたらこの曲は、完成直後に亡くなった作曲者の遺書なのかもしれない。

広上　淳一
©Greg Sailor

名曲シリーズ

VIVA！スペイン

６月２日（土）14：00

指揮　広上　淳一

ヴァイオリン　三浦　文彰

■ビゼー
「カルメン」第１組曲

ご存じ魔性の女カルメンと彼女を愛しすぎてしまったドン・ホセの悲劇を描いたこのオペラは、作曲過程でその内容から劇場側とトラブルが続き難産の末完成された。しかし、型破りで画期的なこの作品は、その迫真のリアリズムが後のヴェリズモ・オペラに強い影響を与え、不滅の名作として万人に親しまれている。１８７５年３月の初演は失敗に終わり、その年の６月にビゼーは急逝したものの、その後、友人エルネスト・ギローが改作を施し、ウィーン公演にこぎつけた。この組曲もギローの手によるもので、美しいメロディ満載のオペラから縦横無尽に音楽を取り出し、印象的にまとめている。

■ラロ
スペイン交響曲

以前、大平まゆみさんや札幌出身で今注目の若手ヴァイオリニスト山根一仁の独奏ヴァイオリンに魅了された「スペイン交響曲」が、再び札響を伴って聴くことができる。今回の独奏は、ＮＨＫ大河ドラマ「真田丸」のテーマ音楽を覇気のある演奏で聴かせた三浦文彰。若手ヴァイオリニストとして人気抜群の彼が、溌剌としたボウイングからどんなスペインの風景を浮かび上がらせるのか大いに楽しみだ。この曲は、交響曲と題名がつけられているが、ラロがサラサーテのために書いた純然たる協奏曲。ラロはフランス生まれだが、祖父の代までは完全なスペイン人で彼もスペインの血を受け継いでいる。さらに当時、フランスを中心にビゼーの「カルメン」をはじめスペインブームがわきおこっていたことも作曲の動機になっているのではないか。

三浦　文彰
©Yuji Hori

■イベール
寄港地

イベールの名を聞くと、私が学生時代に木管五重奏団でファゴットを担当し、彼の粋な楽想を持つ五重奏曲をコンサートで演奏した青春の思い出が蘇る。イベールの出世作ともなった「寄港地」は、第一次世界大戦中、彼が海軍士官として地中海を航海し、異国に寄港した際に接した風物の見聞や、ローマ留学中のスペイン旅行から得た印象が盛り込まれている。３つの作品からなる交響組曲として書かれ、特に第３曲「バレンシア」は、今回のテーマでもあるスペインのにぎやかな雰囲気を民族舞曲によるリズム、旋律を盛り込みながら打楽器などを効果的に用いて見事に表現している。

■シャブリエ
スペイン狂詩曲

シャブリエが狂詩曲「スペイン」を作曲したころ、フランスを中心にビゼーの「カルメン」をはじめスペインブームがわきおこり、ラロやアルベニス、さらにその後ラヴェル、ファリャなどが「スペイン」と名の付く作品をつくっている。シャブリエのこの曲も変リズムを用いてスペインの幻想が、絢爛たるオーケストレーションで描かれている。

平凡な役人生活を捨て、36歳で職業音楽家として世間に認められたシャブリエは、あこがれのスペイン旅行で多くの民謡や舞曲を採譜し、42歳でこの曲を書き上げた。スペイン的な旋律とリズムを巧みに使い、スペイン情緒がたっぷりと味わえる名曲だ。

■ファリャ
「三角帽子」第２組曲

近代スペイン音楽の代表的作曲家ファリャは、バレエ曲「恋は魔術師」と共にこの作品の成功で国際的な名声を得た。ディアギレフがロシア・バレエ団のためにファリャに作曲を依頼したことがきっかけでつくられたこの曲は、スペインの名高い小説家アラルコンの小説「三角帽子」をもとにしている。「三角帽子」は、この物語に登場する好色な代官の権力の象徴ともなっている帽子のことである。

初演時は、第１次世界大戦のためパントマイム『代官と粉屋の女房』として小編成のオーケストラで演奏されたが、後に２つの組曲として大編成で演奏されるようになった。今回演奏される第２組曲は、「近所の人々の踊り（セギディーリャ）」「粉屋の踊り（ファルッカ）」「終幕の踊り（ホタ）」の３曲により構成されている。

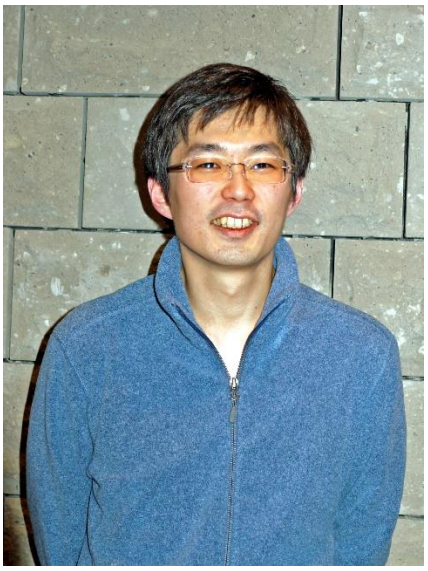
（写真協力　札幌交響楽団）

楽員さんに興味津津 ⑰

ヴァイオリン奏者

高木優樹さんに聞く

対話を通じての音楽作りを



プロフィール

札幌市出身。5歳よりヴァイオリンを始める。桐朋学園大学、同大研究科、桐朋オーケストラアカデミー特別枠研修課程修了。在学中より、霧島国際、別府アルゲリッチ、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン（SHMF）、ラ・フォル・ジュルネ等、他多数の音楽祭に参加、出演。11 年、ベルリンフィルオーケストラアカデミー（通称カラヤンアカデミー）より招待状を受ける。これまでにヴァイオリンを藤原浜雄、山下浩司、ダニエル・スタブラヴァ、トマシュ・トマシェフスキー、室内楽を徳川二男、岩崎洸、北本秀樹、藤井一興、原田幸一郎、東京カルテット等の各氏に師事。2014年札幌交響楽団に入団。

♪「ぽろり」のヴァイオリンを聴いて

札幌出身です。小学校は上野幌西小でした。そのころの上野幌は自然がいっぱいで、みんな野生児のように遊んでいました。小学校の隣は星子牧場で、大正の初めにできた、すごくいい感じのサイロもあって、牛の声を聞いて育ちました。

バブルの頃には宅地開発が始まり、どんどん住宅やアパートが建って、小学校がいくつもできたのですが、今では子供が減って、私の小学校も上野幌東小学校と合併してしまうそうです。

ヴァイオリンは5歳から始めました。母親のいとこがヴァイオリンを習っていたこともあるんですが、当時NHKで「じゃじゃまる、ぴっころ、ぽろり」が出てくる「にこにこぷん」という番組があって、キャラクターの「ぽろり」がヴァイオリンを弾いていたんです。それを見て、習いたいと言ったらしいです。

最初の先生は当時札響でセカンドヴァイオリンの首席奏者だった山下浩司さんです。２０００年頃に定年退職されましたが、今の札響のセカンドヴァイオリンの山下暁子さんのお父さんです。今でも、お元気でご活躍の事と思います。

親も音楽を聴くのはすごく好きで、レコードやCDをたくさん持っていました。当時はDVDがなかったのでレーザーディスクを見たり、CDを聴いたりして、空いている時間はずっと音楽を聴いていましたね。

もともと運動は好きでしたので、ヴァイオリンを習いながら、２年生か３年生の頃はコンサドーレの競技場などでサッカーをしていました、４年生から６年生までは野球部に入っていました。スキーも習いました。父が好きだったので、私も３歳からスキースクールに通わされました。中学、高校までよく滑りに行きましたが、今はけがをしたらどうしようと思って、もう行っていません。中学校では色々と多忙な時期でもありましたので、部活には入りませんでした。

3歳　スキーを始めたころ

♪ 学生時代

大学は桐朋学園大学です。そのあと桐朋の研究科と桐朋オーケストラアカデミーを掛け持ちしていました。そのころはまだ時代が平和だったのか、オーケストラに入りたいと思っていた人はあまりいなかったような気がします。しかし今ではプロのオーケストラに入ることはとても難しくなり、音大を卒業しても就職するのは大変です。卒業して社会に出ていくときは皆それぞれ自分に合った仕事につくことにはなると思います。学生の時は自分の技術や音楽をより高めていくことを考えていたと思います。

大麻高校では吹奏楽部に誘われたので、練習を見に行くと大変上手で、全国大会の常連校だということでした。やっている曲もクラシックばかりでオーケストラの曲を編曲して演奏していました。いいなと思って入部して、コントラバスを担当しました。楽器は違いますが、指の感覚を取り戻すのに多くの時間を費やすことはありませんでした。

そのころ別府アルゲリッチ音楽祭に参加しました。ヴァイオリンのクレーメルは当時 60 歳位になっていて、パワー一辺倒ではない演奏スタイルになっていました。その繊細でささやくような美しい音を拾っていく、そして彼と対話していくということはすごく勉強になりました。アルゲリッチのピアノも本当に素晴らしかったです。クレーメルもアルゲリッチも忘れられません。

桐朋オーケストラアカデミーにはベルリンフィルの各首席奏者が指導に来ていました。コンサートマスターのダニエル・スタブラヴァさんのリードは素晴らしく、ボウイングに強い影響を受けました。珠玉の時間が流れました。スタブラヴァさんは

5歳　発表会

そこにいるだけで自然に音を引き出していくんです。コンサートマスターでこれだけ音が変わるのかと衝撃的でした。スタブラヴァさんは基本的に学校等での教育活動は行っていませんでしたが「カラヤンアカデミーに興味があれば、受験してみないか。」と言ってくれました。当時、ベルリンドイツオペラのコンサートマスターで、ベルリン芸術大学教授のトマシェフスキーさんもオケアカに指導に来ていました。スタブラヴァさんの娘マリアさんもトマシェフスキーさんに学んだ後カラヤンアカデミーに入っていた事もあり、私もお二人から指導を受けることにしました。シンフォニーオーケストラとオペラオーケストラという全く異なる職場環境にある二人のコンサートマスターからご指導いただけた事は、私の人生において、大きな財産になったと思っています。

トマシェフスキーさん

スタブラヴァさん

♪ キタラで弾きたい

２０１４年に札響に入りました。札響の演奏を初めて聴いたのは91年、まだ厚生年金で定期をしていたころでした。ヤマカズ（山田一雄）さんの第九を聴きました。それまではオーケストラの演奏を聴くのはテレビかレーザーディスクの映像だけだったので、初めて生で見た指揮者とオーケストラの印象は強烈でした。

キタラで初めて音楽を聴いたのは97年ころ、4年生か5年生じゃないかな？当時アリーナ型のホールって世界的にもそんなになかったから、札幌の人間として嬉しくて「おおー！」と思いました。当時オーケストラの演奏会ができる場所は厚生年金と市民会館くらいしかなくて、日本ってこんなものなのかなと思っていたところへキタラができたのですから。ここで弾きたいなと思いました。

キタラは本当に日本一だと思います。本当に落ち着いていて気負う感じが全くない。サントリーホールはビルの谷間に建っていて、あの辺を歩いていても落ち着かないです。ステージの奥のバックヤードも狭くて、楽器ケースを開けると楽員同士がぶつかっちゃう。トイレも狭いから便器の間隔が狭いし、上手から下手に移動するときも人がゴチャッとなるので「すみません、すみません」と言いながら行く感じです。キタラは通路も広くのびのびしているので人にぶつかることはなく素晴らしいです。様々なことを総合的に考えて造ってあるんだなあと思います。

♪ 「旅をしない音楽家は不幸だ」

札響では北海道中をくまなく回っていくので、北海道も多様性に富んでいるんだなあと思います。よく考えてみたら自分もそんなに北海道のことを知っていたわけじゃなかったのですね。地方に行くのに車を何時間運転しても苦になりません。違う景色を楽しめるのも、家から遠く離れたところで演奏するのも、ある種の楽しさがあります。モーツァルトも「旅をしない音楽家は不幸だ。」と言ったそうですが、楽器と最低限の荷物を持って、違う土地に行って違うものを食べたりするのは楽しいですね。先々で郷土資料館みたいなところを見て歩くのも好きです。本州のどこから入植したかを見ているとおもしろいし、札幌も場所によって入植者が違うし、どんなふうに街になったのかを知るのは楽しいですね。

暇なときは親父が趣味でやっている畑仕事を手伝わされます。しゃがんで草むしりをするのは足腰にはいいかもしれない。色々育てていますが、一番面積を取っているのはアスパラで、もう15年目くらいの苗です。

♪ やっぱりオケが一番

私なりに好きな作曲家、好きな曲というのはありますが、それを演奏する側とのカップリングによって異なる印象を与えるものです。ピアニストの場合、ショパン弾きと形容されることは必ずしも讃辞とは言い切れませんが、真にショパンを色彩豊かに演奏できる人は、他の異なる様式感を持った作曲家の曲を弾いても素晴らしい成果を上げるものです。オーケストラにも同じ事が言えると思います。

私が一番好きなのはなんといってもオーケストラです。やっぱりオケは良いですね。たとえばピアニストだったら一人で演奏することも多く、自己完結できます。ヴァイオリンの場合、無伴奏で演奏できる曲はものすごく限られています。バッハの無伴奏かイザイかパガニーニの一部で、レパートリーになる曲は本当に少ないんです。弦楽器の場合、必ず誰かと一緒に弾いたり、他の人と一緒に音楽を作るということがほとんどです。自分のリサイタルをやる時でさえ、ピアニストと一緒に弾くわけですからね。やっぱりアンサンブルを作っていくことは人と一緒に対話をしていくということに他なりません。それこそオーケストラの醍醐味です。ソリストも指揮者もあまねくすべての音楽家はどれだけ他の奏者と対話できるか、どれだけコミュニケーションをとっていけるかということになると思います。この演奏会は素晴らしかったなと印象に残ることは年に何度かあります。やっぱりその瞬間にはアンサンブル、そしてオーケストラの醍醐味を感じます。この仕事をしていてよかったなと思います。

現在ではネット等の無料動画サービスの台頭により、無料で音楽が消費されてしまう時代です。このような時代だからこそ人間の技で生み出されるオーケストラの生の響きは尊いものです。録音技術が生まれて１００年以上ですが、クラシック音楽の価値が生演奏にあることは揺るぎのない事実でしょう。１００年間変わらない伝統はこの先１００年後も変わらないと思います。

最後になりますが一人でも多くの方にキタラにお越しいただいて生の演奏をお楽しみいただけるように日々精進したいと思います。

担当／井上・中居・村山・塚田

楽譜支援事業
「札響くらぶ」から今年も50万円を贈呈
札響専務理事　永井健さんからのメッセージ

「札響くらぶ」のみなさまには、毎年、管弦楽曲の楽譜を寄贈していただき、この欄をお借りして、あらためて御礼申し上げます。

札響の予算で「楽譜費」は例年７００万円前後です。支払いの内訳はＪＡＳＲＡＣ（日本音楽著作権協会）への著作権料、レンタル楽譜の使用料、特別な企画の編曲料などの支払いが多くを占め、例年、実際に購入する楽譜の費用は、「札響くらぶ」からいただく寄付金の分を含めても予算の一割程度にとどまります。それだけ多種多様な支出があるということでもあります。

楽譜を管理するライブラリアンが、新しい譜面を手にして真っ先に手がける作業は、プリントミスのチェックでしょう。楽器編成によっては合計で１００部を超えるパート譜を、１部ずつ、１ページずつ、スコア（総譜）と首っ引きで丁寧に確認します。ライブラリアンによると、新品の楽譜でミスがなかった例はないそうですから、当たり前のようにみえて絶対に欠くことのできない作業といえます。

では、そのようにして新しい楽譜のミスを解消してしまえば、古い楽譜は捨ててしまうのか。そういうことも ありません。

一度使った楽譜には、指揮者の指示を奏者がメモした「書き込み」がたくさん残っています。弦楽器のボウイング（「アップ」「ダウン」など弓の動かし方を各パートでそろえて演奏するための記号）も細かく指示されることが多く、そうした記載のある楽譜は、そのオーケストラにとり貴重な歴史の記録でもあります。編曲とまでは行かなくても、指揮者が独自の書き換えをすることもあり、事前にライブラリアンがそういう指示を書き入れたり、コピーを張り付けておいたりすることもあるようです。

また、同じ曲であっても、出版の経緯や校訂者などにより、何種類もの楽譜が存在することがあります。

最近になって注目されたのが、ベートーベンの交響曲第九番。ワーグナー、マーラー、ワインガルトナー、ストコフスキー、近衛秀麿、トスカニーニといったそうそうたる指揮者・作曲家が独自のアレンジを加えてきた名作ですが、基礎となる楽譜はずっとドイツのブライトコプフ社のものでした。しかし東西ドイツの統合を契機に歴史的な新資料が次々と見つかり、１９９６年、同じドイツのベーレンライター社が新しい楽譜の出版にこぎ着けます。初演の三カ月前に完成させた「自筆スコア」に近いといわれるベーレンライター版か、ベートーベンが存命中に手直しを重ねた成果とされるブライトコプフ版か。どちらを使うかは原則として指揮者が決めますので、札響にも両方の楽譜があります。

楽譜が新しくなると、奏者から「古い譜面も見せて」と注文が来ることがあるそうです。新旧のパート譜を見比べて違和感を軽減する、自分なりの記憶を確認しておく、というようなことでしょうか。「細かい部分の確認はもちろんですが、楽譜をイメージで眺めるような感覚もありますね。だから古い譜面との比較が大切」と説明してくれた奏者もいます。

囲碁や将棋のプロは、指し手を考えていく時、頭の中に「盤面」が浮かぶのだそうです。音楽家にとっての譜面も、それに近い存在なのかもしれません。

札響くらぶ鈴木副会長から永井専務理事に贈呈

贈呈した楽譜

今年度の楽譜支援の曲目

R.シュトラウス	アルプス交響曲
ドビュッシー	管弦楽のための映像より第１曲、第３曲
ハイドン	交響曲１０４番「ロンドン」
J.S.バッハ	ピアノ協奏曲第１番
フォーレ	レクイエム
メンデルスゾーン	交響曲第５番「宗教改革」
モーツァルト	「皇帝ティートの慈悲」序曲
モーツァルト	セレナータ・ノットゥルナ
ラヴェル	左手のためのピアノ協奏曲

～白子正樹と札響の仲間たち～
クラリネットの室内楽を聴いて

クラシックを聴き始めて数年たちますが、弦楽器ばかりのＣＤを聴いていたら木管楽器・金管楽器の音色はどんなのだろうと思い始めました。そこで、トランペットやクラリネット、チューバのＣＤを買って聴いていました。それぞれ素晴らしい音でした。

そこへ白子さんのコンサートのチラシが目に飛び込んできました。これを逃す手はないと12月12日ふきのとうホールに出かけました。シンプルなプログラムの上の方に「しらこ企画」室内楽シリーズ①と小さく書いてあるのを見て、奥ゆかしく白子さんらしいなと思いました。

白子さんのクラリネットの音はなにいろ？どんな音かなと興味津津で聴き始めると、何これ、全然違う！今まで聴いたクラリネットと…。私はクラリネットの音は「静」の部に入る楽器だと思いこんできたので、白子さんの音は「動」だと思いました。特にヴァイオリンの岡部亜希子さんとピアノの入江一雄さんとのミョーの曲は、ここを聴いてほしいとの思いが三人とも強く出ていて、音のぶつかり合いを楽しんでいるように聴こえました。チェロの小野木遼さんもヴィオラの鈴木勇人さんも同じで、いかに遊んだら音が合うのか楽しんでいるように感じました。さすがに五人とも息がぴったり合った演奏で、十分に楽しめました。満を持してのコンサートに白子さんは「やったぜ！」と、思っていることでしょう。次回はどんな演奏を聴かせていただけるのかとっても楽しみです。

会員／横山章子

札幌市内中学生招待事業

6年で延べ2975人に！

一人でも多くの青少年に生のクラシック音楽を届け、演奏技術の向上と音楽の深さを体験して貰うために平成24年から始めた「中学生招待事業」について報告します。

6年間で招待した中学校は延べ93校に及び、3000人近い中学生を招待出来たことに私は深い感慨を覚えます。

多感な年代に吹奏楽に興味を持った子供たちが、クラシック音楽の魅力・素晴らしさを知ることは、未来の《札響ファン候補》だと勝手に決め付けています。

もちろん将来、就職・結婚などで札幌を離れる生徒も多いかと思いますが、何処にいても日常生活に潤いをもたらす音楽が溶け込んだ人生を過ごして欲しいと願っています。この事業が着実な成果を挙げ今日に至ったことは、札幌市職員福利厚生会を始めとする多くの関係諸団体の協力のお蔭であり、改めて深く感謝いたします。

7年目を迎え最大の課題は後継者作りです。私も高齢となりましたので、何時（不測の事態）に陥るかもしれません。まだ元気なうちに若い方に引き継ぎたいと思いますので会員の皆さま、是非名乗り出て下さいますようお願い致します。この事業がこれからも末永く続き、キタラを満席にするために少しでも愛する札幌交響楽団のお役に立てれば本望です。

担当／佐藤高明

6年間で招待した生徒数

年度	校数	人数
24	15	463
25	14	437
26	14	436
27	17	536
28	16	543
29	17	560
合計	93 校	2975 人

生徒さんからのお礼の手紙

毎月のように参加された中学生から沢山のお礼の手紙を頂きます。今回は八条中・北栄中・平岡緑中の生徒さん（106人）からの文章を紹介します。紙面の都合でホンの一部になりますことをお許し下さい。

▼毎年札響の演奏を聴くたびに今の自分に足りないものが分かり、とても勉強になります。キタラのホールに一人一人の音が響いていて、とてもきれいなハーモニーを作っていました。私もそのような演奏をしたいです。

▼私は演奏を聴いていて弦楽器の人たちが音を小さくするとき、とても遠くで音が鳴っているように聞こえて不思議でなりませんでした。あと、とても表現力が豊かだったので私も楽器を演奏するときに参考にしたいと思います。

▼どの曲も魅力的だったのですが、特に「フランクの交響曲」がとても華やかで印象に残っています。曲がPやPPになると耳が遠くなったような感覚におそわれて本当にすごくて、どうやったらできるのか気になりました！

▼ロビーコンサートを含め、どの曲もすごく表情がついていて、まるで楽器自体が喋っているようでした。ホルンの独奏は本当に響いていて素敵で、聴いていて幸せな気持ちになりました。この演奏を通して、これからもっと自分がこの曲をどのように吹きたいか、考えていきたいと思いました。

▼ロビーコンサートの時チューバのやわらかくて深みのある音色がホール全体に響いていて、その優しくてあたたかい音を目標に、日々音を出したいと思います。

▼演奏を聴けたことで楽器の技術の向上ができました。演奏はティンパニがとても印象に残りました。あの腕や手首の使い方を今後の演奏で参考にしていきたいです。

▼どの曲も大変すばらしく感動で胸が一杯になりました。この演奏会で自分の技術を向上させるきっかけの第一歩となりました。

▼金管の迫力ある演奏、木管の細かな響き、弦楽器の豊かなハーモニー…楽器の良さを改めて知ることができました。そして音色や響かせ方等、様々なことを学ぶこともできました。

▼どの楽器のどの音にも芯があったり、とても心地良い音色だったりと見習いたいことばかりでした。私はゆったりとした優しいイメージの曲を吹くということがとても苦手なので、札響の皆さんをお手本にして、これからも努力していきたいです。

▼大人数での演奏にも拘らず全ての音が揃っていて、まるで一つのパートを一人で演奏しているかのように感じられました。また表現も曲想に合っていて、とても素晴らしかったです。

▼「チェロと吹奏楽のための交響曲」では一つ一つのフレーズが伝わってきて印象に残りました。宮田さんの独特な世界へ引き込まれそうになりました。

▼プロの方々の演奏している時の動きや息づかいなどを感じることができ、本当に感謝しています。とてもクリアな音も自分の演奏に生かせる貴重な体験でした。

▼札響のトランペットの人たちが二人だけであのキタラを響かせているのを聴きとても憧れました。又、トランペットとトロンボーンが被っていた帽子をミュート代わりにしていて少し驚きました。

▼私はクラリネットを吹いているのですが二曲目のグルダや三曲目のブルックナーのメロディが綺麗に響いていたのが印象に残っています。それとチェロの独奏には心から感動しました。

▼プロの演奏を聴いているとどんどん曲に吸い込まれていきます。それは吹いている方々が音楽をとても楽しんで歌っているからだと思います。よく顧問の先生に「何人で吹いていても一本にきこえるように」と言われますが、流石に札響の皆さんは見事です。

▼管楽器の人は少ないのに各人の音が鮮明に客席まで聞こえました。音に思いを込めて演奏しているのが伝わりました。私にはとても貴重な経験でした。

▼素晴らしい演奏を聴かせて下さった札響の皆さんとバスの手配や案内、その他様々なご配慮をして下さった「札響くらぶ」の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

札響くらぶサロンは、名曲喫茶「ウイーン」で産声を上げた

狸小路７丁目の名曲喫茶「ウイーン」は平成29年12月30日午後５時に閉店する、最後はベートーヴェンの交響曲第９番というニュースを12月13日付けの北海道新聞で見付けた。すかさず電話で問い合わせたところ、予約は受け付けません、午後３時15分ごろご来店下さいとのことだったので、少し早めの３時前にお店に入った。すでに席はほぼ満席であったが、運良く相席のいい席に座らせてもらった。

しばらくして３時35分ごろ、「ただ今から『第九』になります」とアナウンスがあり、店主が選んだに違いないフルトヴェングラーが指揮するバイロイト祝祭管弦楽団の演奏が、２本のホルン、第２ヴァイオリン、セロによる息の合ったピアニッシモで始まった。演奏時間約１時間17分、第４楽章だけでも約26分、演奏終了と同時に巻き起こった拍手が鳴り止まぬ中、店主の横山信幸さん（83歳）が声を振り絞って「長い間ご愛顧有り難うございました」と挨拶され、昭和34年以来58年続いた「ウイーン」に幕が下ろされた。まさにファンに惜しまれながらの劇的な閉店であった。この模様は、１月５日午後６時30分頃ＳＴＶテレビの「どさんこワイド」で「最後に響く『第九』と長年愛された名曲喫茶」と題して放映された。

札響くらぶサロンは平成24年12月１日、この名曲喫茶「ウイーン」で産声をあげた。まだ５年前の話なので覚えておられる方も多いと思う。私は平成25年６月29日に開催された第３回に出席したが、このとき竹津宜男さんの解説による札幌市民交響楽団第１回定期のベートーヴェン交響曲第１番の全曲のライヴ録音を「ウイーン」の音響装置で聴かせていただいた。今回、このことを思い出しながら、「ウイーン」閉店の「第九」を聴いた。札響くらぶ会員も二、三名出席されていたようであるが、「ウイーン」での札響くらぶサロンを思い出しながら聴かれた方もおられたのではないでしょうか。札幌の音楽文化の一翼を担った「ウイーン」の灯が消えて札幌の街は淋しくなりました。

会員／川端習太郎

随想　本棚の隅から　20

ひとり静かにピアノの曲を聴きたいと思って、久しぶりにレコード屋？に入ってみた。クラシック音楽のＣＤ売り場がだんだん狭くなる。中古ＣＤまで捜したけれど希望のものがないので、「札響くらぶ」の会員のバーへ行ってみた。彼の店にはテープ・ＣＤ・レコード等、沢山揃っている。

薫りのいいスコッチを舐めながら好きな曲をかけてもらうのはいい気分だ。

それはさておき、昨年読んだ「蜜蜂と遠雷」に因んだ「その音楽と世界」のＣＤの一曲目がショパンのバラードをクリスチャン・ツィメルマンが弾いている。何故か、心の奥に郷愁を呼ぶ風が吹きすぎた。

若き日のツィメルマンを聴きに行ったことがある

１９８２年10月５日
厚生年金会館ホール
ブラームスのバラード
モーツアルトのソナタ
ショパンのマズルカとソナタ

好きな曲ばかりでわくわくしながらチケットを買いに行ったのを思い出す。

彼の二回目の来日だった。プログラムの冒頭に『一九七五年十月、ショパンの祖国ポーランドの人々は、クリスチャン・ツィメルマンという自国を代表する十八歳の青年ピアニストのショパンコンクール優勝のニュースに興奮さめやらぬ思いでした。』とある。彼は、一九七三年ベートーベン国際音楽コンクールでも優勝している。巨匠の芽はすでに出ていた。一九八一年当時のポーランド首相ヤルゼルスキが厳戒令を発したのを契機にスイスに居をうつした。

親日家で東京にも自宅を持って居るとのこと。東日本大震災の際も日本に留まり、被災者支援のチャリティーコンサートを度々行っていた。

今度、札幌で演奏会があったら聴きに行こうかな？

会員／井上明子

「札響くらぶ」総会のご案内

２０１８年度「札響くらぶ」総会を下記の通り開催します。

多数のご参加をお待ちしています。

日時：２０１８年６月２３日（土）
　　１７：００～（定演終了後）
会場：札幌コンサートホールキタラ
　　２Ｆ　会議室
※参加申し込みは同封の葉書または「札響くらぶ」デスクにてお願いします。

スタッフの活動報告

１月２１日（日）
　第２０回「札響くらぶ」サロン
１月２５日（木）
　会報「札響くらぶ」８１号発送
　第９回運営会議
１月２７日（土）
　札幌市内中学校吹奏楽部招待事業
　手稲中３８名
２月２４日（土）
　札幌市内中学校吹奏楽部招待事業
　新陵中２５名　中の島中２５名
２月２６日（月）
　第１０回運営会議
３月２２日（木）
　第１１回運営会議

編集後記

▼「新進演奏家育成プロジェクト」を聴きに行った。オーケストラでは地鳴りのようにティンパニを打っている彼が、カレードスコープからこぼれ落ちてくる星のように、歓びが弾ける、楽しさが弾む、夢が転がるキラキラとコロコロと音が降るようにマリンバを奏でていた。入川奨さんに拍手。（霧）

▼音楽にさほど興味がなかった若き日。話題の米映画「ある愛の詩」の中で、冒頭の印象的な語りと出会う事に。「彼女の愛した者はモーツアルトとバッハ、そして僕」。私は俄かにモーツアルトを聴き出した。彼女のピュアな意志と強さと重なり、この記憶は今でも聴く度に体の中をフッと抜けてゆく。（島）

▼今年は、やはりモーツアルトからと思い込んだ。クラッシク初心者から覚醒を胸に秘めているからだ。生家はグーグルで見た。勿論「田園」の原風景も自身で踏みしめたいと思った。ザルツブルグへは夢の途中、まだまだキタラで彷徨う。（爽）